

〈研究ノート〉

再生される世界

——「占い」と「占い師」の役割をめぐる一考察——

都築 舞子・阿部耕一郎

(受付 2001年10月11日)

はじめに

本論では、現代社会に生き続けるオカルト、その中でも特に雑誌や新聞などで日常目にする事の多い「占い」に焦点を当てて、研究を行なっている。なぜ現代社会にこの様な、「迷信」と呼ばれる類の存在が、根強く生き残っているのか。現代人は占いに、何を求めているのか。調査は主に、占い師への聞き取りを中心として進めている。これらの調査により、現代に生きる人々が占いや占い師、すなわち「科学でない存在」に何を求めているのかを明らかにする事が、本論の目的である。なお、論文中に使用される語に関しては、主にインフォーマントないしクライアントの使用した語を、そのまま掲載している。また、インフォーマントないしクライアントを指す「タロット占い師」「会社員」等の肩書きも、本人達の自称によるものである。

第1章 調査の目的と方法

1. 調査の目的

毎朝のテレビ番組、新聞紙面などにおいて、「今日の占い」コーナーを目にする事は多い。書店、コンビニエンスストアに並ぶ女性向け雑誌には、必ずといってよいほど「占い」の記事が掲載されている。毎号の巻末に付く「今月の占い」だけでなく、大きくページを割いての「占い特集」が組まれる事も珍しくない。そして、昨今の「癒し・癒し系ブーム」の影響を

受けてか、雑誌広告として掲載されている占い鑑定所¹⁾の宣伝文句には、従来の「黙って座ればピタリと当たる」ではなしに、「先生（占い師）に話してスッキリ」し、「優しいアドバイスを受けて元気に」なる事すなわち「癒される事」に重点を置いていると思われる文面が、多く見られる様になっている。

先進国であり、工業という名の科学の力で発展を遂げた現代の日本で、未だこの様な「迷信」が生き残り、時代に合わせて多少の変化まで遂げているというのは、一体どういう事なのか。マスコミでは、「科学的」であるはずの現代の若者達が、宗教団体に入信したりするのは、モノがあふれ、人間同士のつながりが失われた結果である、としている。宗教団体において、教祖は「すがれる存在」であり、信者同士は「仲間」であるため、教団は、現代社会の孤独な若者達にとって、居心地の良い場所となりうるそうである。そして、教団内における価値観は、信者たちを挫折させ、信仰に走らせた俗世のそれ、すなわち科学とは異なる、「人間の力ではないもの」を基盤として形作られている。

占いにも、「人間の力ではないもの」を頼りに何らかの決定を下す性質など、宗教と似た部分が多い。現代社会の、科学万能教育を受けてきたはずの人々の間でも占いが廃れないのは、人々が、人間（科学こそ万能と考えている自身）にはどうする事もできない事態に遭遇した時、それを打破するために、「人間の力ではないもの」に頼ろうとする思いからなのか。決定を与えてくれる占い師という存在は、占いを利用する人々にとっての、カリスマなのか。しかし、いくら類似点があるとはいえ、安易に、宗教に見られる構造＝占いのそれに当てはまる、と言い切る事はできない。また、占い師にすぎた人々が、宗教ではなくあえて占いを選んだ事にも、何らかの意味があるのではないだろうか。

現代社会においても占いが廃れず、「占い師」という職業が成り立ってい

1) その多くは電話相談形式。文献の〈新聞・雑誌〉を参照のこと。

るのは、なぜなのか。また、占いはハヤリモノである「癒し」の要素を取り入れて、時代に合わせた変化も遂げているが、それではこの時代における占いへのニーズとは、人々が抱える「癒されなければならないもの」とは、一体何なのか。現代の人々にとって、占い・占い師とは、一体どういう存在なのか。これらを明らかにするため、以下の方法で調査を進めてゆく。

2. 先行研究の紹介と検討

調査を進めるにあたって、まずは先行研究を紹介・検討してゆきたい。オカルトの流行は、メディアの発達に並行して進んでいる、という。新しいメディアに囲まれた都市生活者たちは、知らぬ間に、メディアが作り出す擬似現実慣れてしまい、従来の生活規範や自己認識が、不確かなものとなってしまふ。ここで言われる「擬似現実」とは、かつての村落共同体における氏神信仰、禁忌に対する意識などに見られる「共同」幻想ではなく、個人がそれぞれに持つ、他者のそれとは相容れない種類の存在であろうか。そしてこの不確かさ、不安を克服すべく、自己変革の手段として、人々は「心なおし」を求めるといふ。[島藺 1992] この「心なおし」とは、この語を中心テーマとした論において、ケである日常を順調に展開させるため、ケの枯れた状態＝ケガレを払拭する手段である、と説明されている。[宮田 1993] 心なおしとはすなわち、「癒し」の一種として解釈してもよいだろう。そして、人々が心なおしを求めると同じく、現代都市に生きる子供たちも、競争に追い立てられる現実とは異なる世界、すなわち異界の存在を信じる事によって、おそらくケが枯れかけているであろう日常を、これまでとは違う世界として見、感じる事ができる様になって、再生を果たしているのだという。[近藤 1997] ここで「心なおし」と表現されている存在は、科学の力によってなされるものではなく、オカルトという、一種の民俗知によってなされるものである。現代人は、管理社会の中で置き去りにされた「人間らしさ」の回復を求めて、無意識に、村落共同体と共に解体されてしまった民俗知に依存し、それを継承できるシステムを求め

ている。[近藤 1997] 人間を幸福にするはずの科学・合理主義が頂点にまで達したであろう現代ではあるが、未来のイメージは明るいものではなく、多くの人々はその閉塞感、不安、精神的な疲労を感じている。科学・合理主義が生み出した便利さ、豊かさを享受しつつも、その世界を支配している価値観に疑問を持ったり、それに従って生きる事に疲れた人々の前にこそ、今まで迷信と切り捨てられてきた、「現実世界」を超えた存在すなわちオカルトが、世界を変えてくれる新しい価値観として立ち現れるのであろう。[小松 1994] 更に、オカルトと癒しの関係に関しては、オカルト的な手法による行為を、ある文化における医療の一環と見て調査する研究も出てきており、[波平編 1990] オカルトと癒しの関係に関する研究は、複数の学問分野で、様々な手法により多角的に行なわれているといえよう。

本論では、現代を生きる人々にとってオカルトとは、科学によって作られた既存の世界に対する認識を変えてくれる、科学に代わる一つの価値観である、との可能性をふまえた上で、より広く「オカルトの領域に属する占い・占い師たちは、どういった理由、どういった形態で現代社会に生き残り、人々に必要とされているのか」を探ってゆく。

3. 調査の方法

1999年夏、筆者はインターネット上において、占い師 A 氏のホームページを発見し、修士論文作成のためのインフォーマント候補²⁾とした。そして、筆者自身がクライアントとなつての、A 氏への鑑定依頼を 2 度行なつたのち、正式に調査協力を申し込んだ。

以降、2000年秋までを一区切りとし³⁾、筆者は A 氏をインフォーマントとした調査を行なつた。調査では主に、直接面談・電話・メールによる聞

2) この地点での候補者は約20名。その後、協力的な候補者に絞り込んでゆき、修士論文には5名のインフォーマントが登場している。

3) 修士論文作成のための調査期間に相応している。

き取りと、鑑定事例である、A氏とクライアントとの間にやりとりされたメールの要旨紹介、A氏執筆のメールの部分引用、経営の形態上クライアントの同席はないが、A氏が実際に依頼内容を鑑定する現場への筆者による立ち会い、という方法をとっている。これらの方法を用いて、インフォーマントのライフヒストリーと、占い師としての自己への認識、クライアントとの関係といった情報を収集しつつ、事例を解釈してゆく。

第2章 事例の報告

1. インフォーマントの紹介

(1) インフォーマントの基礎データ

占い師 A氏

A氏は30代の男性で、タロットカード占いを専門としている。経営形態は、インターネット上でのみの開業であり、メールにより鑑定を行なっている。料金は「報酬制⁴⁾」というシステムをとっており、支払いは銀行振り込みである。また、鑑定結果に関する質問等には無料で答えるため、クライアントとのやりとりは複数回に及ぶことが多い。そのため、そういったリピーター達と、「ネット仲間」に近い関係となる場合もある。本業は技術系の会社員で、妻子と共に東日本に住む。タロットカード以外の占いは、信じていない。

(2) インフォーマントの傾向

占いは半ば「ボランティア」として、金儲け目的ではなく、自身の価値を計るためにやっている。振り込まれる金額の大きさよりも、自身の鑑定を信じてもらえる事が嬉しい。目指す方向は「癒し系占い師」「大がかりな宣伝ではなく、口コミ宣伝で拡大していくサイト」であり、「いつでも相談にのる、気軽に相談せよ、鑑定後の質問メールは何度でも無料」が謳

4) 最低基準額は設けているものの、それ以上ならクライアントの満足度に従っていくら払っても可、逆に当たっていないと思うのなら、全く払わなくても可。

い文句である。(A 氏の語りより) そのため、一度の鑑定で複数回のメール交換が行なわれる事がほとんどで、いつの間にか、鑑定についてではなく、クライアントの人生相談や日常の報告などのやりとりと化している場合もある、という。これに加えて、A 氏自身が、ホームページ運営のため、クライアント達への鑑定結果メールに「掲示板に書き込みを」というお願い文を入れるので、A 氏とクライアントがメール・掲示板を通じた「ネット仲間」となる事も多い。まれにはクライアント同士も、掲示板を通じて「ネット仲間」となる。また、自身の占い手腕に対しても、ある程度の自信を持っており、「今まで、鑑定を外した事は二度しかない。それも、外れた、というより、カードの解釈が異なっていた、という程度である」と語る。これらの条件から、リピーターとなるクライアントは多い。しかし A 氏は、「他人から悩みを打ち明けられると、自分も一緒になって悩みつつ解決策を探していく方なので、クライアントと精神的に同化してしまう事が多い。そうやって一緒に悩んだ相手が、悩みが解決したらさっさといなくなってしまう(料金だけ払い、鑑定結果に関するその後の報告等なし)の、辛い時もある。そしてそのクライアントが再び、悩みができた時にだけ連絡をよこしてくると、“自分は都合のいい時にだけ利用される、どうでもいい存在なのだろうか”と、悩んでしまう」という。「困った時の神頼み」とばかりに鑑定依頼をよこし、鑑定結果受け取り後は礼もなくなしのつぶて、というクライアントも、多いのだろうか。まれには、鑑定料金の振り込みさえ行なわれない事もあるという。

《A 氏の妻⁵⁾》(A 氏の鑑定を受けた経験のある筆者に対し) なあなあ、ほんまに当たんのん? 皆なんでこんなおっさんに、金出してまで占ってもらうんや。当たるんかいな、占ってもらった事あるうちの友達は、当たるゆうとったけど

- 5) 妻は一度も、A 氏の鑑定を受けた事がない。A 氏との関係において特に悩みが発生せず、もし発生しても、当事者である A 氏に鑑定を依頼する事は不可能であり、加えて A 氏が「自身に関する事は占えない。占っても当たらない。また、自身でなくとも、近親者の周囲の事は結局、自身の周囲の事なので、近親者を鑑定しても多分当たらない」という性質である事が、原因だと思われる。

な。インチキやとは思わんけど…。

(直接面談における A 氏の妻の語りより抜粋)

《A 氏》ほんま、何で皆お金払ってまで来てくれるんかなー？ふっしぎやな、俺なんか素人やのになー？そこらへん知りたいわ。占い師なら、他にもいっぱいおんのにな。(調査を行なう筆者に)分析頼むわ(笑)。自分がどういう位置に立っとんのか知りたいねん。そんなん自分じゃ分からんしなあ。

(直接面談における A 氏の語りより抜粋)

(3) インフォーマントのライフヒストリー

A 氏は現在でも「性別を問わず仲良くしたい性質」(本人談)であるため、高校時代にも、クラスの女子生徒達と仲が良かった。すると、一部の男子生徒達から嫉妬され、陰口を言われる様になった。それが嫌で、その後は男子とのみ話していたが、ある時女子生徒の1人から「そんな事ではいけない」と注意され、女性の扱いに関する指導を受ける事となった。彼女とはそれ以上の関係には発展せず、現在は消息も不明だが、A 氏は今でも彼女の事を「師匠」と呼ぶ。その師匠が、「女の子と話すための手段の一つとして」タロットカードを教えてくれた。A 氏はそれまで、占いなど信じていなかったが、何度占っても同じ様なカードが出るという、「統計学的に考えて、あり得ない事象」に興味を持った。占いを覚えた A 氏は、友人達を相手に、遊び感覚で鑑定を行っていたが、時折こっそりと、悩みを抱えた友人が、真剣に依頼してくる事もあった。大学時代にも同じ調子で、友人や交際相手(現在の妻)の友人達などを鑑定していたが、この頃になると遊びというよりも、本格的な鑑定依頼に近いものばかりになった。以降、友人知人などを鑑定し続けていたが、最近になって、多くの人の役に立ちたいと思う様になり、ホームページを立ち上げた。

2. 事例

(1) 占いの方法

A 氏は会社員のため、メールによる依頼への鑑定は夜、自宅で行なって

いる。タロットカードをシャッフルする前とシャッフルしている最中には集中力を要するが、隣で妻がテレビを観ていても、集中力を乱される事はない。ただ、会話の受け答えなどは出来ない。

A 氏は、居間のテーブルの上でノートパソコンを起動させ、該当の相談メールを開く。その隣にタロットカードを置き、目を閉じ精神を集中させてからカードの山を崩し、シャッフルを行なう。一通りシャッフルが終わったら、それらを再び一つの山にまとめ、カードをそれぞれ定められた順序で定められた位置に、裏返しのまま配置する。その後、順番にカードを表返してゆき、「現在」「過去」「未来」「障害」「対応策」などの位置にあるそれぞれのカードの持つ意味合いにより、鑑定を下してゆく。また、一般的にはタロットカードはその正逆（カードの上下の向き：通常を正、上下逆さまとなった状態を逆という）にも意味を持たされており、通常なら吉とされるカードでも、逆になっていたら吉の逆＝凶とされるのだが、A 氏は「正位置に出たら正位置の意味だけ、逆位置に出たら逆位置の意味だけ、という事ではなく、1 枚のカードには正の意味と逆の意味と二つの意味が含まれているのではないかと思う」と、展開されたカードの正逆を気にしない鑑定を行なう。

《例》「IV 皇帝」のカード…(正位置の意味) 征服・勝利・支配

(逆 の意味) 肥大化したプライド・誇大妄想・
誤った力の乱用

(A 氏の解釈) 何かとの争いの後、それを克服／制覇することができるでしょう。しかし、無茶をすればいつかは反乱が起きるもの。力がある時ほど、自らを律することが重要になるのです。

(A 氏のホームページ記載文より)

(2) 鑑定の事例

事例 1

a. クライアントの紹介

女性 B 20代後半 主婦

b. 依頼内容の紹介

家庭生活に不満はないが、客として通っている店の男性従業員を好きになってしまい、悩んでいるという20代の主婦。Bは夫と子供を愛しており、その男性との結婚も望んでいないが、彼の事が気になって仕方がない。Bに対する彼の気持ちを、鑑定して欲しい。

c. 鑑定とその後

【A氏の鑑定：A氏からのメール文より】

Bは彼に、かなり惚れ込んでいる。しかしながら彼は、店の仕事に夢中で、Bとの関係もあくまでビジネスととらえている。彼にはすでに恋人もいる様子で、Bと彼の仲に進展はないだろう。未来を示す場所には、物事の破壊を意味するカードが出ているため、この恋は深みにはまると大変な事になる。もし、どうしても彼と交際したいのであれば、今の家庭を清算してからでないと、どうにもならない。

【A氏からの個人的なアドバイス：A氏からのメール文より】

個人的意見も、カードとほぼ同様である。遊ぶのは悪い事ではないが、のめり込むのは良くない。遊びと割り切って交際せよ。刹那的な楽しみを見出すことが必要だ。

A氏は自身のホームページに掲示板を設置しているため、新規クライアントへのメールには毎回、「占いの感想でも何でもいいので、掲示板への書き込みをして欲しい」という依頼文を付記している。更にその後、「自分は口コミサイト（ホームページ）を目指しているので、このサイトをあなたの周囲の人々に宣伝して頂きたいと思う」という文章が続く。

【その後】

この鑑定メール送信の後、A氏のホームページ掲示板に、Bからの、「目

からうろこが落ちた気分、家庭を壊すところだった、本当に感謝している」という内容の書き込みがあった。

d. 筆者のコメント

A氏のもとには「顔の見えないメール鑑定」という特質からか、「道ならぬ恋」のため面と向かっては他人に話しにくいであろう、不倫関係の鑑定依頼が多い。それに対しA氏は、「不倫=悪い事」とは思わないものの、「のめり込んでしまう不倫(相手や自分の家庭を壊す事態)」は良くない事とし、特に「独身女性が既婚男性を恋い慕い、結婚を望んでいるパターンには、先がない」と述べている(A氏の語りより)。事例1も、既婚女性からの不倫の相談であるが、鑑定依頼メールには「苦しい」「自分はバカだ」といった台詞が並べられており、クライアントBが不倫を、「悪い事」だと考えている様子がうかがわれる。今が楽しければいい、家庭を壊す気はない、と、割り切った様な事を言うわりには、「自分勝手だ」と自身を責め、不倫と家庭の両立を、ずるい事と考えているかのような台詞も発している。これらから、鑑定を依頼した時、あるいはそれ以前からBは、「不倫は悪い事で、やめなければならない事」だと考えていた、といえよう。A氏は鑑定において、カードの展開から読み取った事象を淡々と述べ、その後に個人としてのアドバイスを加えているが、それらは全て、Bの思いを深くさせない方向への導きである。そして、鑑定結果を受け取ったBは、「目からうろこが落ちた気分、家庭を壊すところだった(壊さずに済んだ)」と、不倫をやめ家庭を守る決意をしたと思われる礼を述べている。ちなみにA氏は、本論には掲載していないが、苦しんでいるBとは逆に、不倫を楽しんでいるとおぼしきクライアントからの、「今後彼とどうなってゆくのか、とっても楽しみですう♪」という様な、軽い口調による鑑定依頼に対しては、不倫ではない恋愛相談に対するのと同じく、彼と上手く交際するための前向きな鑑定・アドバイスを行い、「深みにはまっではいけない」等の、クライアントの勢いを止める様なアドバイスは与えていない。しかしなが

ら、「のめり込んでいる」事例1・2の様なクライアントに対しては、タロットカードによる悪い展開を克明に述べ、クライアントの思いを断ち切らせる方向への鑑定・アドバイスを行なっている。

事例2

a. クライアントの紹介

女性 C 30代前半 会社員

b. 依頼内容の紹介

妻子ある男性と、中断を経ながらも数年間交際している30代の会社員。

Cはその男性を愛しているが、彼の気持ちが分からない。彼との今後について、鑑定して欲しい。

この後、A氏とCは、より詳しい鑑定結果を得るためのA氏からの質問、鑑定結果を受け取ったCからの質問等、この件に関して往復5回半のメール交換を行なっている。

c. 鑑定とその後

【A氏の鑑定：A氏からのメール文とCからのメール文より】

Cからの鑑定依頼メールを受け取ったのち、A氏はCに、「漠然とした依頼内容では、漠然とした結果しか出ない」ので、事態のより詳しい状況（彼とのなれそめ、Cと彼の人柄、Cの今後の希望、など）を教えてくれるよう頼んだ。そのため、2通目のメールにおいてCは、A氏からの頼みに、細やかに答えている。そのメールの最後でCは、「彼のそばで暮らしたい。彼を愛しすぎているあまり、一生独身かもしれない」という心情を語り、「よろしくお願いします」と、再度鑑定を依頼する。以下に、A氏の鑑定結果を記す。

C は彼に対して、行き過ぎるほどの愛情を抱いてる。彼と結婚したい、と思っているのではないか。C に対する彼の愛情は、気まぐれで、C が逃げれば追い、追えば逃げるといった感じである。もし、彼とずっと一緒にいたいのなら、彼に妻と離婚してもらい、C と結婚してもらうべきである。C と彼の仲は、現在は順調だが、将来的には、自然消滅するものと思われる。

A 氏は「手厳しい結果かもしれないが、おためごかしは嫌なので、鑑定結果をそのまま報告する。鑑定に対する質問、相談にはいつでも乗る。残念な結果が出てしまい、自分も残念だ」と自身の心情を書き連ね、C の幸福を祈りつつ文面を括っている。しかし、厳しい結果は、C にとってはすでに予想していた事だった。そして C は、「もし、彼とずっといたいのなら、彼に妻と離婚してもらい、C と結婚してもらうべきである」ということは、C と彼が結婚する可能性もある、という事なのか、と、強い調子で A 氏に問いかける。これに対し A 氏は、「結婚出来る可能性はあるが、確実にできるとは限らない。あくまで、自然消滅を回避する為の手段、という事だ」と、曖昧に回答をしている。こういったやりとりについて A 氏は後に、「無理だ、とはっきりは言えないから、“ちょっと難しい、可能性は低い”という言い方をしているのに、“じゃあ上手くいく可能性もあるという事か”と食い下がられる事があって困る、こちらの気遣いを察して欲しい」と述べている。この後 C は、回答への礼を言い、A 氏が見ず知らずの自分のために労力を使ってくれている事を喜び、「自分はどうすれば彼と結婚できるのか」と、もう一つの質問を投げかける。そして、A 氏がこのメールに返信するより早く、C から再度の鑑定依頼メールが届く。現在の C は、良い鑑定結果だろうと悪い鑑定結果だろうと、何か頼れるものがないと、どうすればいいのかが分からない状態にある。彼を愛し続ける C が、どうすれば彼と良い未来を作る事が出来るのか、占って欲しい、という。これに対し A 氏は、「結婚できる可能性は本当に低い。正面きって話を切り出せば衝突し、最終的には骨折り損の結果となるだろう。話を切り出さなければ、自然消滅する事になる。八方ふさがりだ」という鑑定を下している。

【A氏からの個人的なアドバイス：A氏からのメール文より】

新しい恋愛相手を見つける行動を起こした方が良い。ありきたりなアドバイスで、役にも立てず申し訳ないが、また何かあったらメールを送るように。

【その後】

Cは、自分の事を心配してくれるA氏に、深く礼を言う。続けて、「鑑定結果は気にしないようにしている。彼以外の男性との交際は考えられない。現在は何をする気にもなれない」という近況を報告する。そして最後に、「これが私の運命なのかもしれない」と、現在の心境を吐露し、再びA氏への感謝を述べる。これに対しA氏は、役に立てなかった事を詫び、「たかが占いで、運命が決まっては困る。指図はしないが、恋愛に関してはいい方向に持って行って欲しい。そのための手伝いならいくらでもする」と、励ましている。そしてこの後、A氏に対するCからのメールはなく、以降どうなったかは不明である。A氏はこの事例を、「何を言っても無駄だった例」と名付けて、筆者に提供している。

d. 筆者のコメント

事例2はA氏いわく、「何を言っても無駄だった例」である。既婚男性との不倫にのめり込み、苦しみ、先の見えない生活を送っている独身女性Cに、A氏は事例1の場合と同様、カードによる悪い展開を示して「不倫をやめ、新しい恋人を探すように」とアドバイスしている。しかしCは、「結婚できる可能性は低い、という事は、可能性が少しはあるという事か」と食い下がり、A氏を悩ませている。事例1のBが、不倫をやめるべきではないかという思いを持って鑑定依頼してきたのと同じく、Cは“彼”と結婚する事を自らの思いとして、鑑定依頼してきたのだと言えよう。しかしながら、Bの場合とは異なり、Cの鑑定結果はCの決意に沿わないものであった。A氏からの個人的なアドバイスも、同様の内容である。そのためC

は、A 氏と「可能性が少しはあるのか」「どうすれば結婚できるのか」に関する複数回のメール交換を行なった末、A 氏の占いではどうしても、彼との結婚に関する良い鑑定が出ない、と分かると、「これ（彼との結婚もできず、かといって新しい恋愛を探す気にもなれない）が私の運命かもしれない」という言葉を残し、A 氏とのメール交換を断った。A 氏からの「手伝いなら、いくらでもする」というメールに対する返信もない。当時の C にとっては、彼との結婚以外の「良い方向」など、存在し得なかったのだろう。その後の C については定かではないが、この状況下において「何か頼るものがないとどうしていいのかわからない」と言った C が、新たな依存の対象を求めて、たとえば彼との結婚に関し良い鑑定結果をくだしてくれる、別の占い師のもとへと向かった可能性が、ないとは言いきれないのではないだろうか。

(3) 事例の検討

クライアントの年齢・職業・その他、表面的な共通点・相違点は、c. の表に記す。

a. 事例に見られる共通点

a - 1 2名のクライアントに見られる共通点

2名とも、「今後彼とどうなってゆくのかを知りたい」とは言っているものの、実際には何も分からない状態というわけではなく、「自分はこうしたい・こうなってほしいと望んでいる」というビジョンを、ある程度ははっきりと持ち合わせている。

a - 2 インフォーマントの鑑定・態度に見られる共通点

クライアント達の抱える「不倫」という、一般的にはマイナスとされる要素を非難する事なく⁶⁾、鑑定結果を述べている。

b. 事例に見られる相違点

b-1 2名のクライアントに見られる相違点

Bは1回の鑑定で納得し、鑑定結果に関する質問等も行なわなかったが、Cは鑑定結果に納得せず、鑑定結果に関する質問を何度も行なっている。その後、Bは問題を解決し、A氏のもとを円満に去っているが、Cは問題を解決せぬまま、A氏のもとを去っている。

b-2 インフォーマントの鑑定・態度に見られる相違点

Bに対しては、ほぼ感情抜きで口調で、鑑定結果だけを淡々と述べたのち、鑑定結果とほぼ同様であるA氏個人としてのアドバイスを、短くまとめている。この恋愛を続けよとも、やめよとも言っていないが、割り切れと指示している。Cに対しては、鑑定結果を述べた後、「悪い結果で自分も残念だ」「役に立てず申し訳ない」「手伝いならいくらでもする」と、同情的な心情を書き連ねた後、個人のアドバイスとして、この恋愛をやめ、新しい恋愛対象を探すよう勧めている。このやりとりは、往復5回半に及ぶ。

c. 事例の整理

	事例1 B	事例2 C
性別	女	女
年齢	20代後半	30代前半
職業	主婦	会社員(独身)
相談内容	未婚男性との不倫(片思い)	既婚男性との不倫(交際中)
メール回数	往復2回(メール+掲示板書き込み)	往復5回半
希望	彼の気持ちを知りたい	彼と結婚したい
鑑定結果/ アドバイス	彼とは進展なし/ のめり込まず、割り切るべき	彼とは自然消滅/ 新たな恋愛対象を探すべき
A氏の態度	淡々と鑑定結果を報告	同情的に鑑定結果を報告
問題の解決	解決	未解決
クライアント のその後	納得して礼を述べる(リピーター化するかは、現段階では不明)	非納得で礼を述べる(以後2年経つが、未だ連絡なし)

6) 事例1 d. 筆者のコメント(A氏の語りより)を参照のこと。

第 3 章 考 察

1. 考 察

(1) クライアントに関する考察

事例 1・2 において、同じく「不倫をやめよ」という鑑定を与えられたクライアント B・C のうち、「不倫をしている自分は、愚かである」「家庭を壊したくない」と考えていた B は、鑑定結果に納得した。彼との結婚を願いとしていた C は、納得しなかった。自身の未来に関して、占い師からの指示を求めつつも、クライアントたちはそれぞれ、未来について何も考えていない状態というわけではなく、「こうなって欲しい」「こうしたい」という自身の希望を持って、占い師のもとを訪れていると思われる。そして、鑑定結果が自身の意に沿っていれば納得し、占い師の指示に従う事を承諾するが、意に沿っていなければ納得せず、相談内容を未解決のまま去る、という現象は、神社などでおみくじを引いた際に、大吉ならば 1 回きりで満足するが、凶ならば「なかった事にして」もう 1 度引き直す、という行動と、似た様な心情によって起こされているのではないか。事例 2 において「何か頼るものがないとどうしていいのかわからない」と言った C が、A 氏のもとを去った後、「引き直し」として、新たな依存の対象を求め、たとえば、彼との結婚に良い鑑定結果を下してくれる、すなわち C の意思を貫く事を肯定してくれる、別の占い師のもとへと向かった可能性は、ないとは言いきれないのではないか。未来が分からない段階での、クライアントにとっての「良い占い・占い師」とは、自身の意思に沿った鑑定を下してくれるそれなのではないだろうか。

(2) インフォーマントに関する考察

事例 1 においても 2 においても、鑑定結果は、「不倫 = 悪い事」とは思わないものの、不倫にのめり込むのは良くない、とする A 氏の考えに基づいた結果となっている。非難こそしないものの、A 氏は、不倫にのめり込ん

でいる B・C には、不倫をやめさせる方向で話を進めてゆき、不倫を楽しんでいるとおぼしき別のクライアントには、一般的な恋愛相談に対するのと同じく、彼と上手く交際するためのアドバイスなどを与えている。そして、同じく「不倫にのめり込んでいる」相談であっても、まだ片思いで、完全にはのめり込んでいないであろう B に対しては、淡々とした口調で、今後生じるであろう不利益等が述べられた鑑定結果を報告し、今後どうするかは B の意思に任せる、といった風に締めくくっている。しかし、すでにのめり込んでいる C に対しては、初回のメールから、暗にはあるが不倫の中止を勧め、「何かあったらいつでも相談にのる」といった、同情的な言葉を与えている。更に A 氏は、その後、鑑定結果を受け入れようとしない C と、同じ問題に関する堂々めぐりのメール交換を 5 回半行い、そのやりとりの中で常に、C に不倫をやめさせるべく「説得」を繰り返している。

2. ま と め

科学によって作り上げられた現代社会において、悩みを抱えてしまった人々は、自身に悩みを抱えさせたこの世界とは異なる価値観を持つ事で、世界への見方を変え、自身を取り巻く困難な状況を、これまでとは異なる状況すなわち困難ではない状況として認識する事によって、自身を守ろうとしているのではないか。占いに心を向け、占い師に鑑定を依頼するという行為によって、オカルトという新しい価値観を手に入れた人々は、そこで更に、新しいだけでなく、自身を肯定できる価値観である「自身の意思に沿った鑑定」を求めるのだと思われる。その結果、意思に沿った鑑定結果を得られた者、すなわち自身を肯定できた者は納得し、意思に沿った鑑定を得られなかった者、すなわち自身を肯定できなかった者は納得しない。ここで納得できなかった者が、自身を肯定できる価値観となる別の鑑定結果、それを下してくれる別の占い師を求める可能性は、ないとは言いきれないだろう。そして、クライアントに新しい価値観を与える存在であろう占い師は、占いで得た卦を報告するだけでなく、自身の価値観や経験を織

り交ぜつつ、クライアントとのやりとりを行なっている。すなわち、クライアント1人に対し占い師が100人いれば、100通りの鑑定結果がある、という事であろう。そして、これら100通りのパターンは、クライアントにとっての、選択可能な100種類の価値観、といえるのではないだろうか。

ある価値観（現代社会においては科学）によって作り上げられた世界において、問題を抱えてしまった人々は、問題を解決すべく、既存のそれとは異なる価値観を求める。そしてその価値観とは、自身の意思を肯定してくれる存在でなければならない。政治・宗教・哲学その他、更にそのカテゴリの内ですら、様々な主義・流派に細分化されるほど多くの価値観が存在する現代社会において、悩みを抱えた人々にとっての「占い・占い師・占いの鑑定結果」とは、自身を取り巻く世界を、自身に住み良く再生するために選択できる、「価値観の一つ」なのではないだろうか。

おわりにかえて —今後の課題—

本論において、「占い・占い師・鑑定結果とは、人々にとっての、選択可能な価値観の一つである」という可能性を提示した。しかしながら、占いに心向け、占い師のもとを訪れた人々が、無料でも行なえるであろう占いと、得られるであろう鑑定結果、すなわち「自分で行なう占い」⁷⁾を選択せず、なぜ「占い師」という存在に鑑定を依頼したのか、に関しては、言及していない。また、これと関連して、クライアントへの聞き取りがほぼ皆無であり、筆者の状況把握が少々傍観者的すぎる事、占い師からの語りを多く収集したにも関わらず「現代社会の占い師像」への考察が少ない事など、課題を数え挙げればきりが無い。占いとその鑑定結果は、人々にとって選択可能な価値観の一つである、とするならば、それを行なう「占い師」とは、人々にとってどの様な存在なのか。意思を肯定してくれる友人なのか、進むべき道を示してくれる指導者なのか、すがりつけるカリス

7) おみくじ・トランプ・インターネット上における「ボタンをクリックするだけ」の占いなど、手順さえ知っていれば特殊な技術を必要としない種類のものなど。

マなのか。今後は、「現代人にとっての占い・鑑定結果とは何か」と併せて、「現代人にとっての占い師とは何か」にも焦点を合わせ、人々がそこに求めている「新しい価値観」「意思の肯定」以外のものについての、明確な提示を目指しつつ、研究を進めてゆきたい。

文献（敬称略あいうえお順）

- 飯島吉晴 1999 『幸福祈願』 筑摩書房
小松和彦 1994 『妖怪学新考 妖怪からみる日本人の心』 小学館
近藤雅樹 1997 『靈感少女論』 河出書房新社
渋谷 研 1992 「対峙する神々—宗教的職能者間の対立と共存をめぐる—考察—」
民族学研究 第56巻第4号
島藺 進 1992 「情報化と宗教—現代宗教の変容—」『思想』92年7月号
高橋紳吾 1997 『超能力者と霊能力者』 岩波書店
田邊信太郎・島藺進・弓山達也編 1999 『癒しを生きた人々 近代知のオルタナ
ティブ』 専修大学
波平恵美子編 1990 『病むことの文化 医療人類学のフロンティア』 海鳴社
藤田庄一 1990 『拝み屋さん』 弘文堂
星野 晋 1994 「問神場面における「命運」概念の用法をめぐる—台湾台南市の
童・tang-ki の問神の事例から—」 松山大学論集第6巻第4号
又吉正治 1998 『正しい甘えが心を癒す—沖縄文化に見る日本人の源流』 文芸社
宮田 登 1993 『「心なおし」はなぜ流行る 不安と幻想の民俗誌』 小学館
湯川洋司 1997 『山の民俗誌』 吉川弘文堂

<新聞・雑誌>

中国新聞

毎日新聞

CanCam（小学館発行 女性向け月刊誌）

JJ（光文社発行 女性向け月刊誌）

nonno（集英社発行 女性向け月2回発行誌）

MISTY（実業之日本社発行 女性向け月刊誌）

Summary

Revived World of Human Inside
—Consideration on fortune-telling and social role of the
fortune-telling teacher—

Maiko Tsuduki and Kohitiroh Abe

Even in modern society, there are many people who want in fortune-telling cure.

In order to examine this social phenomenon, we must gather information on this phenomenon. This paper report field study on gathering information and consideration.